

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

キル・ビル

~KILL BILL~Vol. 1

配給/ギャガ・ヒューマックス共同配給

2003 (平成15) 年11月7日鑑賞

Data

監督・脚本: クエンティン・タラン
ティーノ

出演: ユマ・サーマン/ルーシー・
リュー/ヴィヴィカ・A・フ
オックス/マイケル・マドセ
ン/エル・ドライバー/デヴ
ィッド・キャラダイン/千葉
真一/ジュリー・ドレフュス
/栗山千明/ゴードン・リュ
ー

👁️👁️ みどころ

タランティーノ監督が放つ、何とも異色で国際色豊か(?)なものすごいエンターテインメント作品。しかし賛否両論が極端に分かれること必至。良くも悪くもタランティーノ監督が日本のチャンバラ、ヤクザ、演歌が大好きなことはよくわかる。映画のテーマは、金髪のヒロインによる徹底した復讐劇。最後に流れる梶芽衣子の『怨み節』がなぜかピッタリ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ド肝を抜くタランティーノ監督の映画>

クエンティン・タランティーノは、1994年の『パルプ・フィクション』でカンヌ映画祭最高の賞であるパルムドールを受賞した監督だが、大の日本好き。そしてチャンバラ好き。さらにマカロニ・ウェスタンや香港カンフー映画も大好きという、とにかく変わった人物らしい。この映画のタイトルの『キル・ビル (KILL BILL)』とは文字通り、「ビルを殺せ!」ということ。つまり「ザ・ブライド」と名乗る、金髪のヒロイン (ユマ・サーマン) が、かつての暗殺集団のボスであるビル (デヴィッド・キャラダイン) とその手下共を次々と殺していくという復讐劇だ。

約3時間の大作だったが、03年7月16日に至って急きょ2部構成にすることを決定。日本では03年11月に第1部が公開された。予告編の段階から話題沸騰。公開されるや否や賛否両論が噴出した。

<面白い日経新聞のコラム>

ちなみに03年11月3日付日経新聞朝刊は、『春秋』というコラムの欄でこの映画を取

りあげている。その出だしは、「何じゃこれは、という映画を見た。タランティーノ監督の新作『キル・ビル』(前編)だ。」とされている。そして「日本の劇画調アニメの挿入があったり、主人公が日本語のセリフを話したり、雪の日本庭園での女親分との一騎打ちのバックに30年ほど前の梶芽衣子の歌が流れたり。金髪の座頭市が活躍し下駄履き集団がタップダンスを踊る北野武監督の映画が、欧州で喝采を受ける状況と、多分、通底するものがあるのだろう。」と述べる。そして最後は「『キル・ビル』にしても、北野版『座頭市』にしても、やたら人が斬られ、血しぶきが上がるのは閉口だが、「ついていけない」と思うか、「面白い」と感じるのか。時代は後者の人とともにあるのだろう。さほど確信はないけれど。」と結んでいる。これを読むだけで、日経新聞のお偉方たちがこの映画を見ていかにびっくりしたかがよく分かろうというものだ。

<復讐に燃えるヒロインは金髪女性>

この映画のヒロインであるザ・ブライドは、元ビルのスタッフで剣術、カンフー、銃器に精通した暗殺の天才であり、ビルの愛人でもあった。そして自然界最強の毒蛇「ブラック・マンバ」のコードネームを与えられていた女性。しかし妊娠をきっかけに更正することを決意し、堅気の男性と結婚しようとした時、惨劇が……。新郎新婦をはじめ結婚式の参加者は全員ビルによって惨殺され、ブライドの頭にも銃弾が貫通した。しかしブライドは奇跡的に一命をとりとめ、以降4年間昏睡状態を続けていた。

そんなブライドが遂に目を覚ました。そして少しずつ戻ってくるあの忌まわしい記憶。自分の夫は……。生まれていたら4歳になっているはずの自分の子供は……。ここから、「復讐の鬼」と化したブライドの復讐劇の始まりだ。

<ビルの部下は美女ぞろい>

ビルの第1の手下はオーレン・イシイ(ルーシー・リュウ)。彼女は剣術の達人。幼い時、自分の目の前で両親を殺害したヤクザの親分に対して、自らの手で復讐を果たし、「殺し屋」としての頭角をあらわした。そして今や、その冷酷さと殺しの実力が認められ、東京のヤクザ社会のトップとして君臨している。この凄味のある中国人と日本人のハーフを「まさに適役」といえるルーシー・リュウが熱演している。もっとも、時折しゃべる日本語はヘンだが……。

ビルの手下の美女はその他に弁護士のソフィー(ジュリー・ドレフュス)や左目に眼帯をかけた美女エル(ダリル・ハンナ)など。いやまだいる。それは17歳の女子高生、ゴーゴータ張(栗山千明)だ。彼女はイシイの身辺保護をするケンカ殺法の達人。女子高校生のミニスカートをはいて、援交をねだるオッサンを一突きで殺してしまう冷酷非道な女だ。ゴーゴーボールをふり回しながらのブライドとの一騎打ちは、まるで宮本武蔵と鎖鎌の宍戸梅軒との対決の女性版。色気もあるが、不気味さの方が目立って面白い。

このようにビルの手下はなぜか美女ばかり。だからブライドとの対決も美女対決ばかりで、これもタランティーノ監督好みか・・・。

もちろん男の手下もいる。そのリーダーはカンフーの達人ジョニー・モー（ゴードン・リュウ）。しかし男はみんなブラックスーツを着てブラックマスクをつけているから、顔がわかりにくいし、あまり見栄えがしない。どうしても美人女優の方に目がいってしまう。とにかく『キル・ビル (KILL BILL)』第1部では、ブライドがこれらのビルの手下たちを次から次へと「絵ナメ」にしていくわけだ。

<第1のハイライトは青葉屋での立ち回り>

この映画の第1のハイライトは、日本料理店「青葉屋」へ乗り込んだブライドとこれを迎えるツイシイの手下たちとの日本刀による大立ち回り。

「もう人を殺す道具をつくらない」と決心し、今は引退している服部半蔵（千葉真一）のもとへ、ブライドは沖縄まで訪れた。そしてブライドの復讐の気持ちを理解した半蔵はブライドのために最高傑作の刀をつくり、これを与えた。こんなマンガみたいなストーリーによって半蔵の名刀を手に入れたブライドは、何十人という男たちに対して、走り回り、飛び回りながらこれを次々とたたき斬っていく。手下たちの腕が飛び、足が飛び、首が飛び、そして血しぶきが吹きあがり、うめき声が充満し、たちまち画面は地獄絵だ。この延々と続くド派手な立ち回りを「快感」とみるか、「グロテスク」とみるかは人によって違ってくるだろうが、私は、この立ち回りシーンは『マトリックス』や北野版『座頭市』より、よほどよく出来ていて面白いと思った。

<第2のハイライト>

第2のハイライトは、雪の日本庭園の中でのブライドとツイシイとの美女対決。黄色いファッションに身を包んだブライドと白の着物姿のツイシイとの「対決」は見モノ。また、この2人が対決に向けて、あるいは闘いの最中に、日本語で交わす会話は少しヘンでマンガ的。しかし別の目でみればかえって面白い。更にすごいのは、この対決の後に流れる演歌の曲。これは何と、梶芽衣子の「修羅の花」～『修羅雪姫』（73年）のテーマだ。

<第2作への「つなぎ」は、女弁護士ソフィの役目>

ブライドは女弁護士のソフィだけは腕を切りとった状態のままで殺さず、ビルの元へ帰らせた。その目的は、今日の出来ごとをビルに伝え、またブライドが復讐に赴くことをビルに伝えさせることだ。

さあ、ビルはこのブライドの復讐に対してどう立ち向かうのか？そして4年前に死んだと思われているブライドの子供は本当に死亡していたのか・・・？第2作への楽しみを持たせるタランティーノ監督のテクニックがさえている。

<思い出す多くの名作映画>

この『キル・ビル』にはタランティーノ監督の好きな映画のイメージが数多く満載されている。まずこの映画の主題と共通する復讐劇をテーマとした映画は次のようなもの。

マカロニ・ウェスタンでは、『新・夕陽のガンマン／復讐の旅』（67年）や『怒りのガンマン／銀山の大量殺』（69年）など。

また日本映画では、梶芽衣子版『修羅雪姫』（73年）や同じく梶芽衣子の『女囚さそり』など。何でもタランティーノ監督は梶芽衣子が大のお気に入りであり、日本の美女を見ると、誰でも「梶芽衣子そっくりだ」と誉めるとのこと。ホンマかいな・・・？

また刀（日本刀）での斬り合いによる血しぶきの噴出や手足が切りとられる描写は、勝新太郎の『座頭市』シリーズや劇画を映画化した『子連れ狼』シリーズ等で使われたもの。

このように『キル・ビル』ではその他さまざまな1960～70年代の映画を彷彿させるシーンが随所にあらわれている。そして、どうもこれがタランティーノ監督の趣味らしいが、私にいわせれば、私と同じような子供じみた趣味。だから私は好き！

<印象深いオープニング曲とラスト曲、そして数多くの挿入曲>

映画のオープニングには、ナンシー・シナトラが歌う『バン・バン』という軽やかでロザミややすい名曲が印象的に流れてくる。そして途中で流れる曲も、『怒りのガンマン／銀山の大量殺』のテーマや『新・仁義なき戦い』のテーマなどオモロイ、昔の曲ばかり。そして極めつけは、ラストの字幕の中で流れる、梶芽衣子が歌う『怨み節』。これは『女囚さそり』シリーズの主題歌となった名曲で、団塊世代の男たちならみんな知っている有名な歌だ。ちなみにその歌詞は次のとおり。字幕が流れる中、途中で席を立った人は梶芽衣子のこの名曲を聴かずに立ち去ったことになるが、それではこの映画をホントに観たことにならないよ・・・。

『怨み節』

- ①花よ 綺麗とおだてられ
咲いてみせれば すぐ散らされる
馬鹿な 馬鹿な 馬鹿な女の怨み節
- ②定め 悲しと諦めて
泣きを見せれば また泣かされる
女 女 女なみだの怨み節
- ③憎い 悔しい 許せない
消すに消えない 忘れられない
尽きぬ 尽きぬ 尽きぬ女の怨み節
- ④夢よ 未練と笑われて

覚めてみせます まだ覚めきれぬ

女 女 女心の 怨み節

⑤真っ赤なバラにやトゲがある

刺したかないが 刺さずにやおかぬ

燃える 燃える 燃える女の怨み節

⑥死んで花実が咲くじゃなし

怨み一筋生きて行く

女 女 女のいのちの 怨み節

<終了後の観客の反応は？>

映画が終わり字幕が流れ始めると、座席のあちこちで、「フー」というため息や、同伴者とのヒソヒソ話が始まった。最近こういう状況はあまりなく、最近では『ロード・オブ・ザ・リングス2つの塔一』(03年)が終わった後「エー！」という声を聞いた時ぐらいだ。これは、中途半端な終わり方に対する抗議の声だったが、この『キル・ビル』終了後の反応の声は、「すごかったね」、「怖かったね」、「面白かったね」、「マンガみたいだったね」・・・その他さまざま。そして私は、それらのすべての感想が当たっていると思うが、思わずそういう感想を声に出してしゃべりたくなるほど、この映画が観客に与えたインパクトが大きかったことは間違いない。

<私はこんな映画大好き！>

冒頭に紹介した日経新聞のコラムのように、年配の人たちはこの映画をあまり好まないかもしれない。しかし私は逆に、1960年代～70年代の映画をたくさん観ている年配者だからこそ、それらのイメージを「ごった煮」にし、また日本映画好きミエミエのタランティーノ監督がつくった、この映画の面白さがわかろうというものだ。ヘンな日本語はマンガみたいに面白いと思えばいいし、劇画調アニメもタランティーノ監督の子供じみた趣味だと思えばいい。子供じみた趣味は誰だって持っているものだから。これに対して今の若者はマカロニ・ウェスタンの残忍な復讐劇は観ていないだろうし、梶芽衣子が歌う『怨み節』の歌詞は知らないし、その「重さ」もわからないはずだ。また、殴り込みをかけた高倉健が、1人静かに『唐獅子牡丹』の曲が流れる中、去っていく後ろ姿のカッコ良さなども知らないはずだ。

たしかに腕や足が飛んだり、血しぶきが吹きあがるシーンが残酷だと思う面はあるものの、これは捌れ(?)。そんなことに目くじらを立てるよりも、カンフーの立ち回りをとり入れた身のこなしや、座頭市や宮本武蔵バリの芸術的ともいえるヒロインやイシイの刀さばきを楽しめばいいそしてその中でヒロインの復讐の思いを共有していけばいいわけだ。

息もつかせぬアクションの連続と、画面の切り換えの妙。私はタランティーノ監督のこ

の映画は大好きだ。『マトリックス』や北野武監督の『座頭市』よりよほどいい出来だと私は思う。そして、この映画は私のような団塊の世代の人たち、とりわけちょっとヤンチャな男たちが昔を思い出しながら、存分に楽しめばいい映画だと思うがどうだろうか……。

2003（平成15）年11月8日記